

国際経済の 読み方

新飯田 宏 著

国際化の波は、
私たちの日常生活レベルにまで
着実に押し寄せている。
いまや国際経済の流れを
読まずして何も語れない時代である



112
F711
359

国際経済の 読み方

新飯田 宏 著

国際化の波は、
私たちの日常生活レベルにまで
普及に押し寄せている。
いまや国際経済の流れを
読まずして何も読めない時代である。



東洋経済新報社

著者紹介

昭和6年 東京に生まれる。
昭和30年 横浜国立大学卒業。
昭和35年 東京大学大学院博士課程修了、経済学博士。
現在 横浜国立大学経済学部教授。
編訳著書 「日本の物価問題」(共著) 東洋経済新報社、昭和39年。
「日本の産業組織」(共編著) 岩波書店、昭和44年。
W. レオンチェフ著「産業連関分析」(訳) 岩波書店、昭和44年。
R. ドーフマン著「価格と市場」(共訳) 東洋経済新報社、昭和47年。
「リーディングス インフレーション」(共編著) 日本経済新聞社、昭和48年。
「産業連関分析入門」(著) 東洋経済新報社、昭和53年。
「インフレーション」(著) 日本経済新聞社、昭和55年。
「近代経済学」(新版、共著) 有斐閣、昭和62年。
「日本経済の構造変化と産業組織」(共編) 東洋経済新報社、昭和62年。

国際経済の読み方

定価 1600 円

昭和63年5月6日 発行

著者 ^{にい だりろし} 新飯田宏

発行者 高柳 弘

発行所 〒103 東京都中央区日本橋本石町1-2-1 東洋経済新報社

電話 編集 03(246)5661・販売 03(246)5467 振替 東京3-6518

印刷・製本 東洋経済印刷

本書の全部または一部の複写・複製・転記載および磁気または光記録媒体への入力等を禁じます。これらの許諾については、小社(電話03-246-5634)までご照会ください。

©1988 〈検印省略〉 落丁・乱丁本はお取替えいたします。

Printed in Japan ISBN 4-492-44082-8

は し が き

この十数年の間に、日本経済には様々な側面で急激な構造変化が生じていますが、長期的な変化としては、国際化の進展という潮流が最も重要な要因といえるでしょう。とくに一九八五年秋以降の急速な円高の進行と共に、日常の生活実感としても、日本が国際経済の網の目の中に深く組み込まれ、相互の結びつきが強くなっていることを強く印象づけられていると思います。円高のために、輸出型加工製造業や関連地場産業が深刻な不況を心配される一方で、円高による輸入コストの低下で、大幅な利益を享受している非製造業や輸入型製造業が発生し、産業構造や地域経済の雇用構造に複雑な影響を与えています。また、円高を利用した日本企業の海外進出が急激に増加する一方で、金融・サービス業を中心に外国企業の参入も活発に展開されているといった具合です。世界の金融センター、情報センターとしての東京への内外企業の進出で、東京の地価が地方に比べ暴騰しているのも国際化の影響といえるでしょう。

国際間の経済取引は「モノ」や「カネ」に止まらず、「ヒト」の交流も極めて活発です。かつ

ては、ぜいたくと考えられた海外への（新婚）旅行が盛んなのも、国内旅行よりも割安であることとの合理的結果に他なりません。円高によるキャピタル・ゲインと、日本のサービスコストの上昇率が海外に比し相対的に大きいことを利用した選択的行動と考えられるからです。

しかも、国際化の進展する中で、日本経済の国際社会における相対的地位が大きく上昇し、その責任も増大していることを意識せざるを得なくなっています。簡単な計算でも、一九七六年に一人当たりGNPが約五〇〇〇ドルで自由世界一六位であった日本の地位は、八二年には一万ドルを超え、八五年には一万一一七六ドル（一ドル二三五円で評価）で第七位に上昇しています。しかし、その後の急激な円高を考慮して、仮に一ドル一六〇円で計算しますと、八五年のGNP水準でも一万六四一五ドルとなって、世界第一位のアメリカ（一万六六六六ドル）とほぼ同じ水準になります。

さらに、八三年以降の大幅な経常収支の黒字の結果、わが国の対外純資産（対外資産残高から対外負債残高を引いた値）は、八六年末で一八〇〇億ドルを超え、世界一の債権国となっています。他方、アメリカは八三年以降の大幅な経常赤字の結果、八六年末には二五〇〇億ドルを超える世界最大の借金を抱える債務国に転落したのです。

このような状況下では、経常収支黒字の続く日本に、経済大国としての何らかの役割が期待されるのは当然でしょう。八三年以降、厳しさを増している経済摩擦は日米間に止まらず、日欧、

日・アセアン間でも、多様な広がりを見せているのが特徴です。いまや、単なる日本からの特定輸出品への批判に止まらず、日本の（輸入）市場解放、産業政策、独禁政策、日本の各種制度（商慣習や非関税障壁、税制）にいたるまで多岐にわたっています。自動車の輸出自主規制など、いくつかの対応もなされています。しかし、自動車の自主規制によって、日本の自動車労働者、ひいては日本経済も、またアメリカの消費者もこれによって影響されるのはもちろんです。

このように、国際化が進めば進むほど、日本経済と世界経済の動向は相互に大きな影響を及ぼし合う関係になっていきますから、経済（貿易）摩擦はむしろ頻発すると考えなくてはならないように思われます。われわれの今後の経済生活を計画するとき、国際経済の動向を考慮せざるを得ないわけです。円高はどこまで進行するのでしょうか。お互いが貿易を通して、自国で作るより安価な製品を他国から購入した結果が赤字だと、どうして批判が集中するのでしょうか。どのような方法で日米の大幅な経常収支不均衡を解消できるのでしょうか。

情報化、技術革新という別の経済構造の変化要因も加わって、今日の経済取引は簡単に国境を越えて行なわれます。株価の動向や金利差を利用して簡単に資本は国際間を移動します。いったい、為替レートはこれとどのように関連して動くのでしょうか。

これからの日本経済がどのような方向に動くかを考えるには、以上述べてきた問題についての基本的な経済知識が必要です。八五年秋の先進五カ国蔵相・中央銀行総裁会議での、いわゆるプ

ラザ合意を中心とした国際経済のその後の動きについては、学術論文などで優れた論文がいくつかが提出されています。しかし現在の国際経済問題を、やさしい経済学の基礎的原理と関係して一般読者向きに説明してある入門的書物となると、以外と少ないのが実状です。本書はこのようなギャップを埋めることを意図して、現在のマクロ経済の不均衡問題を中心に書かれたものです。したがって、国際経済学の単なる抽象的入門書とは異なり、現実の国際経済の最も重要な問題を、平易かつ明瞭に説明することを中心に、国際経済学の基礎知識を自然に体得できるようにというのが本書の目的です。このため各章とも、興味ある論争的問題を選び、問題の所在が明らかになるように努めてみました。

本書の構成については序章で詳しく触れていますので、ここでは別の視点からこの書物の特徴を述べておくことにします。まず、序章では、現在の国際経済における最大の緊急課題が、日米を中心とする経常収支不均衡問題と、発展途上国の累積債務問題であることが述べられます。そしてこれら二つの不均衡問題の関連が説明されます。これら二つの不均衡を是正する際に必要とされる国際間政策協調がどのような内容であるのかに触れられます。

次に第一章では、経常収支不均衡問題の背景を一九七〇年代から追跡し、最近の円高にいたるプロセスをレーガノミックスとの関係で説明します。最後に、問題解決に向けての簡単なシナリオを検討します。第二・四章は、第一章で展開されている経常収支不均衡の問題を、テーマごと

に詳述した章です。まず第二章では、国際収支表の読み方から説明し、各収支尻の意味を説明します。そして、国際収支の不均衡が何を意味するのかがわかりやすく説明されます。なお、複雑な国際収支表を直観的にわかりやすく説明するため、いくつかの工夫が図表の作成に試みられています。第三章では、日本の貿易構造について説明し、ミクロサイドからの經常収支不均衡の意味が説明されます。そして、いわゆる比較優位の理論の内容が吟味され、同時にその限界も指摘されます。また最後に、マクロの調整策との関係が明らかにされます。第四章はいわゆる資本収支の分析にあてられ、国際間に資本が移動する理由が説明されます。ここではまた、為替レートが決定される外国為替市場のメカニズムと機能が簡単に説明されます。

最後の第五章では、もう一つの不均衡問題である発展途上国の累積債務問題を、短期の流動性不足問題と長期の債務返済能力問題の二つの側面から考察します。そして、アジアとラテン・アメリカの累積債務問題の相違と、日本の発展途上国への貢献のあり方が議論されます。

さて、全体を通して、やさしく、わかりやすい説明と、図表の活用による理解の深まりを期待したのですが、説明不足の点や、力量不足のため、意図したほどやさしい説明になっていないかもしれません。また、私の誤解があるかもしれません。この点、お気づきの点をお知らせ戴ければ幸いです。なお、この本をまとめるにあたり、約二年ほど前に横浜の朝日カルチャーセンターで開かれた特別公開講座「国際経済の読み方」での五回にわたる私の講義録を参考にしたことを

つけ加えておきます。

本書が出来上がるまでには多くの方々のお世話になりました。まず本書の性格上、正確な出典を注記しないまま、その研究成果を利用させていただいた多くの先学の方々に対し、心から感謝したいと思います。また、日頃の議論を通して、本書の内容と直接または間接に関連する議論で、いろいろな形で示唆を与えられた横浜国立大学の同僚諸氏にも深く感謝します。

次に本書の意図を少しでも実現するため、草稿の段階からほぼ全頁にわたって丹念に読んで下さった横浜国立大学の私のゼミナール学生、田岡成基君には心から感謝の意を表わす次第です。少しでも読み易くなったとすれば、彼に負うところ大だと思っています。

最後に、本書の刊行が大幅に遅れたのは、主として私の怠惰な性格にあります。が、たまたま私がこの二年間大学行政に係わらざるを得なかったという事情もありました。このプロセスで辛抱強く私を励まし、企画・編集の面で多々改善の労をとられた東洋経済新報社出版局の小島信一氏に心からお礼申し上げたいと思います。小島氏の協力なしには、本書の出版は到底不可能だったからです。

一九八八年三月

著者

目次

はしがき

序章 国際経済をどう読むか	1
---------------	---

——二つの不均衡を考える——

1 経常収支の不均衡	2
------------	---

2 累積債務問題	6
----------	---

第一章 円高への歩み	13
------------	----

1 円高への前史(1)——一九七〇年代	15
---------------------	----

一 固定相場制から変動相場制へ 17

二 原油価格の急騰とスタグフレーション 20

三	発展途上国の債務の増大	22
2	円高への前史(2)——一九八〇年代前半・レーガン政権第1期	24
一	レーガノミックスの登場	25
二	デイスインフレへのスタート	27
三	高金利・ドル高	30
3	G5合意と円高(ドル安)への移行——レーガン政権第2期	37
一	レーガン政策の軌道修正	37
二	ポリシー・ミックスの変更	41
三	デイスインフレの進行	43
四	すぐには縮小に向かわない経常不均衡	44
五	経常不均衡とポリシー・ミックス——予想される 三つのシナリオと日本の選択	46
第二章	国際収支の均衡・不均衡	53
1	国際収支表の読み方	54
一	経常収支	55
二	資本収支と基礎収支	58

三	総合収支と金融勘定	62
四	個別経済取引と国際収支表	63
五	国際収支と対外資産・負債残高の関係	67
2	国際収支の不均衡とは何か	71
一	自発的な勘定での均衡	72
二	經常収支の不均衡	73
三	基礎収支の不均衡	76
四	総合収支の不均衡	77
3	經常収支不均衡の原因	79
4	今日の不均衡問題	81
第三章	日本の貿易構造と経済摩擦	89
1	日本の輸出構造	90
2	日本の輸入構造	96
3	比較優位の理論と経済摩擦——経済摩擦のミクロ的分析	100
一	比較優位の理論	101

二 日本貿易構造と比較優位の理論	109
三 比較優位の理論の限界と貿易摩擦	112

4 日本を経常黒字は構造的か	119
----------------	-----

一 ミクロ分析からの予測	119
--------------	-----

二 経常収支不均衡のマクロ分析	122
-----------------	-----

三 国際収支の発展段階説	125
--------------	-----

5 経常収支不均衡と日米の調整政策	128
-------------------	-----

一 為替レートの変動による調整	128
-----------------	-----

二 財政・金融政策	130
-----------	-----

三 マクロ政策の協調について	133
----------------	-----

第四章 資本移動と為替レート	135
----------------	-----

1 経常収支と資本収支	137
-------------	-----

2 わが国資本収支の推移	139
--------------	-----

3 国際資金循環の推移	144
-------------	-----

4 資本移動の決定要因	148
-------------	-----

1	累積債務問題の背景	180
5	外国為替市場	152
一	資本移動と為替市場	152
二	外国為替市場と通貨供給	153
三	為替レートと金利裁定	154
四	為替投機	158
五	為替レートの決定	159
6	為替レートのオーバーシュート	161
7	国際資本移動の理論と実際	163
一	内外収益率の格差と資本収支	163
二	短期資本移動と内外収益率格差	173
8	わが国の対外資産残高の推移	174
	発展途上国の累積債務	179

2	累積債務危機の進展	185
3	G 5 合意とベーカー構想	190
	一 G 5 合意後の累積残高の動き	191
	二 ベーカー構想	192
	三 対外債務の株式化の試み(チリ、メキシコ、フィリピン)	197
4	ラテン・アメリカ諸国とアジア諸国の相違	200
	一 ラテン・アメリカ諸国の債務問題とその対応	201
	二 アジア諸国の債務問題	210
5	債務問題と日本の役割	217
	一 債務国への資金流入の援助	218
	二 債務国の工業化への協調	219
	参考文献	223

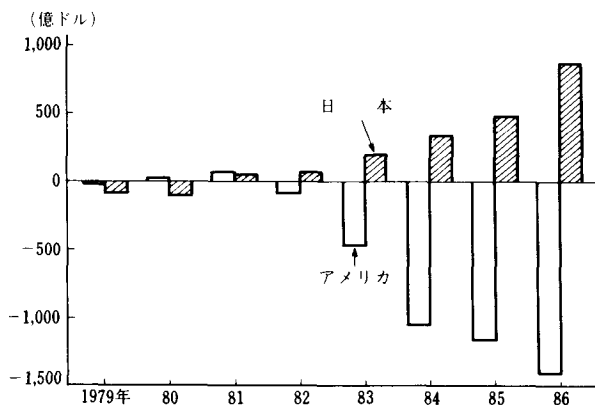
序 章 国際経済をどう読むか

——二つの不均衡を考える——

「国際経済の読み方」という本書の狙いを簡単に紹介することから始めましょう。

現在の時点で国際経済上の最も重要な経済問題は何かと問われれば、私は躊躇なく、二つの対外不均衡問題をあげます。一つは先進国間の、とくに日米間を中心とする経常収支の不均衡は正の問題であり、もう一つは発展途上国の累積債務問題です。強いていえば、前者が短期的な対外不均衡問題、後者がやや長期的な対外不均衡問題といえるでしょう。しかも、これらの問題の解決は簡単ではなく、今後かなりの期間、国際経済の主要問題となり続けると考えられます。本書の目的は、これらの不均衡問題をどう考えたらよいかに焦点をおき、国際経済の諸問題を説明することです。その意味では、「国際経済の読み方」は「二つの対外不均衡をどう読むか」という

第Ⅰ図 日本とアメリカの経常収支の推移



(資料) 日本銀行「国際収支統計月報」および IMF, *International Financial Statistics* より作成。

スタンスで書かれているといつてよいでしょう。さて、次章以下の本題に入る前に、ここではこの二つの不均衡問題の輪郭を簡単に説明し、本書の構成について解説しておきましょう。

1 経常収支の不均衡

わが国の経常収支の黒字が目立って拡大し始めたのは、一九八三年からですが、一九八六年(暦年)には遂に八六〇億ドル、対GNP比で四・五%という記録的な水準に達しました(第Ⅰ図)。この大幅黒字がアメリカの経常赤字とならんで、世界経済の不安定要因であるかどうかは、若干意見の分かれるところですが、石油ショック時のOPEC(産油国)の衝撃的な大幅黒字を一つの尺度として評価してみましよう。